

お だか じょう せき
尾 高 城 跡 (市指定史跡)

尾高城跡は米子市街地の東7kmにある米子市尾高集落の東側に位置し、大山山麓裾の西端にあります。城跡に立つと西側に箕蚊屋平野が開け出雲の国境の山並みと手間要害、新山要害などの中世山城を遠望することができます。

尾高は古くから伯耆西部の交通の分岐点で、また大山寺への入口という位置にあり、要衝の地として栄え、戦国期には毛利氏の尼子氏攻略の伯耆の拠点として重要な位置を占めていました。史料による城の始まりは、室町末に山名氏の一族の行松氏の居城で、戦国時代には毛利氏の杉原盛重が城主となり本格的に整備されたと思われます。

城跡は中世館跡の名残を残す連郭式の城館跡で、丘陵端を利用して土塁、空堀、切岸を巡らせています。二の丸・本丸・中の丸・天神丸・南大首・越の前・方形館跡、IV郭の主要な八つの郭を配置しています。発掘調査によって掘立柱建物跡、礎石建物跡、堀、溝、井戸、橋げた跡など城内施設の一部を物語る遺構が確認されました。調査では中国や朝鮮の輸入陶磁器、備前、常滑、瀬戸美濃等の陶磁器をはじめ、銭、煙管、鉛玉等の金属製品などが発見され、これらの出土品から鎌倉時代後期から江戸時代初期まで使われた城と考えられます。



尾高城跡遠望



方形館跡



南大首地区の櫓状掘立柱建物跡



山下地区の通路土塁